

# サイ・テク 知と技の発信 こころむ

[276]

## 埼玉大学・理工学研究の現場

### ■共通点

リオ五輪も閉幕し、日本ではメダル数が過去最高の41個など話題の多い大会であった。4年後の東京五輪では、アスリートの一層の活躍を期待すると同時に、運営する立場として日本の

技を取り入れた演技で得点を争う。界に実証する絶好の機会となる。スポーツ競技では、単純で分かりやすいルールに従い、特に体操は課題演技と独自の新しい演技で得点を争う。界に実証する絶好の機会となる。



白井肇(しらい・はじめ) 58年生まれ。東京工業大学大学院総合理工学研究科博士後期課程材料科学専攻修了(工学博士)。東京工業大学大学院総合理工学研究科助手、埼玉大学工学部助教授(准教授)を経て2008年より現職。専門は太陽電池を中心とした材料探索、機能材料工学

# 埼玉経済

## 「研究者とアスリート」

### 白井 肇 教授

う。初めて参加する選手もいれば、3、4連覇が期待され、プレッシャーとの戦いで臨んだ選手も多く、メダルにつながった選手もいれば、1回戦で姿を消す選手などさまざまで、重圧の中で戦った。

練習環境、国民性、文化の相違も含まれる中で、スター選手の活躍、自国の選手の活躍、質の高い演技は視聴者に感動を与えた。また、今回の五輪では難民選手団が初参加し、メダルにこそ至らなかったが、政治不安定で十分な環境でなくても、その活躍は多くの人に勇気と希望を与えた。

一方、科学技術に携わる研究者・技術者も前記と同様、アスリートと共通する点が多々ある。体力・知力、技術、方法論は各研究者・技術者の生い立ち、

環境を基盤に依存し、独自の関心に研究活動を維持し、分野をすす点で共通している。強い信念と協力してもらえ環境造りが必須であることに気づく。定年までの8年の中で、どこまで感動を呼ぶ研究成果、何をメッセージとして伝えられるのか、自分の現役の時代に何かひとつ形にしたい、そう思うところである。

五輪ではアスリートは金メダルを目標とする。研究者は、自分の発想・技術が何らかの形で科学技術の発展に貢献し、世の中に波及してはじめて評価を受ける。時間のかかる競技である。自分の任期中にどれだけ小さな成果でも、分かりやすい形で世の中に貢献できる理念・技術の種を提唱することで、自分なりの金メダルを獲得したいと思う。

■研究者への要求  
しかし、最近の研究者・技術者への要求は、理解されやすい成果(出口)、質の向上、スピードで、時間的余裕を許さない風潮になっている。私が駆け出しの時代には、自分の関心のみで研究内容を深めることに集中できた。年齢とともに研究活動を維持し、分野を

環境を基盤に依存し、独自の関心に研究活動を維持し、分野をすす点で共通している。強い信念と協力してもらえ環境造りが必須であることに気づく。定年までの8年の中で、どこまで感動を呼ぶ研究成果、何をメッセージとして伝えられるのか、自分の現役の時代に何かひとつ形にしたい、そう思うところである。

企業、団体、商店街などの話題や情報をお寄せください  
TEL 048-795-9161 FAX 048-6653  
k@keizai@saitama-np.co.jp